
MUV-LUV ALTERNATIVE ～転生者は世界を救う？～

バースバイスリーブ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MUVーLUV ALTERNATIVE 転生者は世界を救う？

【Nコード】

N8191P

【作者名】

バスバイスリープ

【あらすじ】

神さまのミスで死んだ男は強制的にMUVーLUVの世界に転生させられてしまう。そして「世界を救って…」と神からの伝言を受けるが……

作者はMUVーLUVを小説版しか知りません。またこの作品はチートを超える超チートや、ご都合主義、独自解釈などがございます。苦手な人はブラウザの戻るをお願いします。作者に文才はございませんので暖かい目で見守ってください

転生前の出来事

「いやったー！ー！ついにゲットできたぜ「ヒュッケバインMk
-2」！！！」

やっと手に入れたプラモデルを手には浮かれまくってる俺がいた
俺の名前は乾^{いぬい} 煉、高校2年でいわゆる「ヲタク」というやつだ。
今日は待ちに待ったスパロボのプラモデル、ヒュッケバインMk-
2を買ったのだ、今やヒュッケバインシリーズは絶版でインターネ
ットのオークションぐらいでしか手に入らないし店では手に入らな
い一品でもあるソレを買えたのだからプラモヲタクである俺が舞い
上がらないワケがない。

「さーて、どうしようかな〜♪まず仮組みして、バランスみて、サ
フ吹いて〜♪」

キイイイイイイイ！！

「え？」

ドコンッ！！

グシャー！！

トラックが視界に大きく写ったのが俺が見た最後の風景だった

（??????????）

「起きてくださ〜い」

何だ…声が聞こえる…

「だから起きてくださーい」

…うるさいな、こっちは明日のヒュッケバインで忙しいのに…

「起・き・て・く・だ・さ・い!!」

「だああああ!! うっせええええ!!」

うるさい…って何で俺の目の前に幼女が?

つか俺は確かトラックにはねられて壁にはさまれたはずじゃ…

「そうです。あなたは死にました」

なんで俺の考えていることがわかる?

「そりゃ、神さまですから」

エッヘンと胸(まな板)をそらす少女…

「ん?なんで人が一人死んだぐらいで神さまなんかが出て来るんだ?」

そう言ったとたん神さま(少女)は固まった

「す…」

「す?」

「すみませんでしたー！ー！」

「は？」



「つまり…ゲームのやりすぎで寝不足だったところに間違えておれの書類に『今日中に死ぬ』ってハンコを押したんかい…」

「あははははは……ゴメンナサイ」

目の前で少女（神さま）が土下座をした、てかこれからどうなんのよ、俺。

「あ、そこは大丈夫ですよ！」

なにがだよ…つか心を読むんじゃねえ

「あははははは……コホン、では説明させていただきます」

どっからともなく取り出したホワイトボードに何かを書いていった

「今回はこちらの不手際で混乱させてしまい申し訳ありません。処遇についてですがあなたは”転生”してもらいます」

「転生？」

「はい、転生です」

「どこに？」

「え〜とここです」

ホワイトボードに書かれた文字を読んで叫んだよマジで

「ってマブラヴかよ！！」

「えっいやだった？」

「死亡フラグがメチャクチャあるじゃねえか！！」

「え〜」

「え〜じゃねえよ！！変えろ！そんな物騒なとこ！！」

「ふふ〜ん、無理ですよ〜他の転生先はいっぱいですからね〜」

「何でだよ！！つかナゼに自慢げ！！！！」

「他の神たちが間違っただけ殺しちゃった人が沢山いるんで、それに怒られるのは私だけじゃないし♪」

「……もうヤダこんな神さま……」

ていうか何でそんなにミスするんだ？もしかしてストライキ？

「ま、そういうことで転生してらっしゃい♪」

神が言った後、急にあたりが白く発光し始めた

「なっ！？まぶし…ってこら！！まだ話は終わっちゃ…！？」

「あ〜後、体はトラックと壁の間に挟まってグチャグチャだから代わりの体を提供してあげるよ。きつと喜ぶよ〜」

あのバカ神の声を聞いた直後、俺の意識は白い光の中へ消えていっ

た

2話 通信相手はクソ神だった(前書き)

なんやかんやで2話目連続投稿ってつらい・・・・・・・・

2話 通信相手はクソ神だった

Side 煉

光が収まった後に見た光景はロボットアニメによくあるコクピット
みたいところだった

「は？ここどこだ？」

というかまったくどうなっているかが分からんのだが……

ピッピッ……ピピーー……！！

「な、なんだ！？」

「マスターの意識の覚醒を確認、これより待機モードから起動モ
ードへ移行」

ピッピッピッ……ヴーーン

「なんだ、なんだ、なんだああ！！」

「機体電圧上昇、PS装甲展開……問題なし、ベクタートラップ……
正常稼働、トロニウム・エンジンおよびGNドライブ……異常なし、
各システムチェック……オールグリーン、各兵装チェック……オー
ルグリーン」

「うわぁ……」

モニターに光が点り機体の各コンディションらしきパラメーターが次々と表示されていた

「すごい……」

「機体各パラメーター確認……全コンディションオールグリーン……『ヒュッケバイン・ゼクス』起動します」

「っ!?! うおおおおおおお!!」

うお! いきなり立ち上がったぞ!! どうなってるんだコレ!!!

「起動を確認、次の命令をマスター」

「ッ!?! だれだ!?!」

突如、声が聞こえて大声をあげる、ここには俺しかいないぞ!!

「こちらです。マスター」

「こちらって…へ?」

前を見ると「ZXS」と文字の書かれたモニターが表示されていた

「えっと…君は?」

「はい、私はゼクス。この機体『ヒュッケバイン・ゼクス』に搭載されているAIです」

「AI? 『ヒュッケバイン・ゼクス』?」

AI名もそうだが機体名はなんか中二病っぽい名前だな……

「はいこの機体は操作が難しく、『イノベーター』あるマスターか

私が許可し援護しなければ動くことはおろか起動すら怪しくなりま
す」

ん？チョットマテ

「今、イノベーターって言わなかったか？」

「言いましたが何か？」

「誰がイノベーター？」

「マスターです」

「……………いつなったんだ？」

「ここに送られてくる時かと推測します」

あのクソ神め今度あったらただじゃおかん……………！！

ピーー！ピーー！

なんだ？いきなり鳴り始めたぞ？

「通信のようです」

「誰からだ？」

「分かりません。どうしますか？」

「切っちゃえ」

「了解」

ピッ

ふうこれでよし！！

ピーー！ピーー！

「また着ました。マスター」

「：しゃあない出てやるか」

「了解、モニターに出します」

表示されたモニターに写っていたのはひどく慌てた様子のあのクソ神だった

「あつてメエ！！よくも人の意見も聞かずにこ世界へ落としてくれたな！！」

『ううゝそれは謝るよゝだから許してゝ』

「ふざけるなよ！！おまえがミスって俺を殺したからこうなったんだろうが！！！！！！」

『本当にそのことは謝るよゝだからこっちの話も聞いてゝ！』

なんだか必死になっているが、まあ言いたいこともたくさんあるけど聞いてやろう

『ううゝ実は……』

このクソ神の話によると、どうやらこいつ等が住んでいる場所で大規模な摘発があったらしい。その摘発というのが「人間を勝手に殺して別の世界に放り込んで楽しもう」ということらしい。そのことでいろいろヤバイところも浮き彫りになったとかで……というか人の寿命を勝手に弄って、殺して別の世界に送って楽しむとか……ありえねーし

ん？しかしなんでこのことでコイツが俺に連絡をとるんだ？

『今回の摘発は「ミスした場合にも適応させる」との命令だったので私も入ってしまい、罰としてあなたのサポートをしろって言わ

れました……』

「なるほど……しかしサポートっていうのは？」

『具体的には世界情勢や他の転移者の報告ぐらいです』

「転移者？」

『ああそうですね行ってませんでした……最近、世界と世界の境界線があいまいになってきていて時折、違う世界に着てしまった人々をそう呼ぶんです』

ふーんそうなんだ……

『さあ説明もおわったことですので原作ブレイクをお願いしますね』
♪

はあ？

「なんでさ……このままどっかに逃げればいいんじゃないの？」

『それではだめです！！私達が許されるのは、転送者を送った世界をハッピーエンドにしなくてはいけないのです！！！！』

「そうかい……じゃあ今どこだか分かるか？」

そういえばすっかり忘れてたけど、ここどこだ？

『えーと今いる場所は日本帝国で年号は1998年、ちょうど重慶ハイヴから日本にBETAが上陸した年ね』

「は？」

『ちなみに最前線』

一瞬、眩暈がしたまだなにも慣れていない機体によってBETAと戦う？冗談も休み休みにして欲しい……

「ゼクス!!」

「了解、最短での近い戦場を割りだします」

俺はすぐさまゼクスに命令し、最短のコースを割り出させる

「これか…後は俺の度胸と運しだいか……」

正直な話とても怖い、だが目の前で死に行く奴を見捨てるほど冷たくもない

「マスターいけます」

「ゼクス…」

『ほらほら行ってよくこっちは命かかってるんだから』

よし………

「クソ神!! テメーはあとでぶっ飛ばす!!!!!!」

『え〜! なんでも!!!!』

「うるせええええ!!!!!!」

こうして俺は初めての戦場に行くのであった

2話 通信相手はクソ神だった(後書き)

感想・アドバイスお待ちしております

3話 どうやら最初は弱いっぽい(前書き)

今年最後の投稿になります。

3話 どうやら最初は弱いっぽい

S i e d 煉

現在、俺は戦場に向かって飛行しているのだがその前に確認しなければならぬことがある

「ゼクス…この機体の兵装は？」

さすがにどんな兵器を装備しているかわからないものをぶっつけ本番で使うほど俺も馬鹿ではない

「全兵装のパラメーターをモニターに写します」

ヴウンと音とともに表示された装備を俺は見た

「兵装

フォトン・ライフル……使用可能

頭部バルカン砲……使用可能

ビームソード……使用可能

Gインパクトキャノン？……使用不可能

スーパードラグーン……限定条件での使用可能

GNキャノン……使用不可能

輻射波導砲……使用不可能」

「もはや何でもありだな……この機体……」

普通に装備だけ見てもこの世界じゃオーバーテクノロジーだなこりや、

「マスターそろそろ着きます。装備の説明はどうしますか？」

「あードラグーンの限定条件だけでいい他は後で聞く」

「了解しました。ドラグーンは本来ドラグーンシステムにより制御されておりますがシステムの調整不足により使用できません。なのでかわりにT-LINKシステムを使い制御していますそのためパイロットに多大な負荷がかかります」

なんか思っていたよりきつそうでもなさそうだな……

「やるか……T-LINKシステムを俺に、ゼクスは機体の制御を頼む！」

「了解、T-LINKシステムコンタクト」

そのとたん頭痛が始まり、吐き気がでてきた

「ぐっ!!」

「T-LINKシステム60%同調、ドラグーン待機状態」
スタンバイ

さらに頭痛や吐き気が大きくなった気がした

「がはっ!!」

「T-LINKシステム60%で固定、どうやら現時点でのマスターは60%のコンタクトが精一杯のようです」

荒い息を吐く俺にゼクスが判断を出した

「ハアハア……た、たった60%でこんなにつらいのか……？」

「いえ、おそらくマスターはこの世界に来て日が浅く、また自分の能力についていけないでしょう」

ハアハア…つまり？

「時間をかけて慣れろ…ということです」

「そうかい…」

こういうのってやっぱり修行とか必要なのかな？

「マスターそろそろ戦闘体制を……きます！」

「っ！！！」

その言葉を聞き頭と振って意識をモニターにむける。もう戦闘は始まっているようだ

「いくぞ！！」

オーブンコンバット

「了解…戦闘開始」

そして俺は戦火の中へ飛び立った

S i e d o u t

S i e d ? ? ? ?

私は戦術機を走れせながら戦場のことを考えていた
いまだ前線では私を逃がすために多くの斯衛たちや他の衛士たちが
戦ってくれている

しかし私は時々思ってしまう

本当に私は守られるだけの価値はあるのだろうか

榊首相のように政治をするにも経験や決断力が足らず役不足
今は斯衛の衛士たちと共に戦場からの脱出をしている

こんな私が…政威大將軍殿下という立場で本当にいいのかと考えた
くなる

そんなことを考えていたときだった。奴らが現れた

BETAが現れたのだ

斯衛軍が足止めしてくれてはいるがやはり数の暴力には勝てず、一
機また一機と数を減らしていった

私も攻撃しようとしたそのとき横から突撃級が向かってきていた
身体から冷や汗がでる

諦め最後のときを迎えようとしたそのとき…

翠の閃光が視界を埋め尽くした

まぶしく目を開いてはいられなかったが光が収まるとそこにはBE
TAの死体しかなかった

「「「……………」」」

誰も声が出せなかった。今まで蹂躪し続けていたBETAがいとも
簡単に死んでいるのだ私も声が出せない

『大丈夫か?』

通信が突如開きみな驚きその方向へむいた

そこには黒い翼が8枚ある見たこともない戦術機がそこにあった

3話 どうやら最初は弱いっぽい(後書き)

もしかしたらまた夜に投稿するかも・・・・・・・・

4話 デモンストレーション・・・・・・・・かな？（前書き）

な、何とかできた……でもちょっと強引だったかも……

4話 デモンストレーション……………かな？

Side 煉

「大丈夫か？」

戦場で戦っていたらなにやら戦術機の集団を発見、BETAに襲われていたから助けてやったはいいけど…………声をかけたら一斉にこっち向きやがった、コッチミンナヨ

「「……………」」

おーいなにか言えよ…………寂しいじゃんか

「ハア…行くぞ、ゼクス」

「了解、マスター」

まだT-LINKシステムに慣れていないからこんなとこにいないでとっとと離れよう思い、踵をかえそうと機体を動かしたそのとき

「っ！ま、待て！！！」

誰かに呼び止められた、そして振り向くと銃口がこちらにむいてました♪……………なんですか

Sied out

Sied 月詠 真耶

最初、その機体を見たときはワケが分からなかった

自分達が警護する殿下が突撃級に襲われたとき私は何も出来なかった
自分が敬愛する殿下を守れなかった

あの時そんな力にない自分が恨めしく思った

しかし殿下が襲われることはなかった。突如現れた翠の閃光それが
突撃級はもちろん我々の周りにいた

BETAまでも巻き込んで…

この機体は殿下を助けてくれた。しかしこんな機体は所属不明の戦
術機なのだ。いつこちらに牙をむくかわからないだから……

「っ！ま、待て！！！」

背を向けようとする機体に銃口をむける私だった

S i e d o u t

S i e d 煉

せっかく助けたのにナゼ銃口を向けられるのか？これほど理不尽な
ものはない

『その未確認機、所属を答えろ。答えなければ……』

ピーー！ピーー！ピーー！ピーー！

モニターにロックオンの警告モニター表示されアラームの警告音が
鳴り響く

つか助けてやったのになんだこのやり方は……

『もう一度言う…所属を答えろ。さもなくば……』

『真耶さん！やめてください！』

『しかし殿下！！』

『やめなさい真耶さん。これは上意です！』

『……はっ』

なんか言い争ってるけど大丈夫か？

『先ほどは失礼しました。態々助けにいただいたのに申し訳ございません』

一人の女性が謝ってきたがその瞬間周りの機体からかなりの殺気が漏れ出した

(うわぁ………)

『どうかしましたか？』

「い、いえなんでもないです」

ここで何かこの子にやったらヤバイと空気で分かったつか怖いよマジでー！

『ところであなたは どうしてここへ？』

「……なにBETAが居たんでね。この機体の調整やデモンストレーションになるかなあって」

我ながら苦しい言い訳だと思うがまあ信じてくれそうだしいつか

『な、調整だと……』

『バカな……』

『死ぬ気か!?!』

はい、信じられないような口ぶりありがとうございます

『ではその技術はいずれどこかの国に売る、というわけですね』

「ま、そうなりますね」

『……そうですか』

まあ未知の技術こんなのが欲しいのはわかる。なにせBETAを駆逐できるかもしれないしろものだしな……ちよつといじめすぎたか…

「でもまだ売るところは決まってるないし、気長に探すよ」

『え?』

「コードネームは凶鳥だ。ヒュッケバインじゃあ、またな!」

そう言って俺はその場を後にした。ちよつと強引だったかな、なにか後ろで叫んでたし…まっ、いっか

S i e d o u t

S i e d 煌武院 悠陽

またな…ですか、初めて言われた言葉ですがとても暖かい気がします。私は立場上、気楽に話かけてくる人などいません、あヒュッケバインの凶鳥と名乗った人ももう会うこともないでしょう。しかし…

『殿下』

「真耶さん……」

『ここは危険です。直ちに下がりました』

「…はい」

いつかどこかで出会う気がする…そんな気がしてならないのです……

S i e d
o u t

4話 デモンストレーション・・・・・・・・かな？（後書き）

感想・指摘・アドバイスお願いします

5話 竜宮島 ー死亡フラグー (前書き)

あけましておめでとうございます。新年初めての投稿になります
これからよろしくおねがいます

5話 竜宮島 ー死亡フラグー

S i e d 煉

「さてと……」

辺りが荒野と化した戦場を見ていた

あれから戦術機の集団から分かれた俺は、BETAを駆逐し続けた。その間にもいろんな衛士やら部隊やらを助けまわった。具体的にはオープン回線で「彩峰中将申し訳ありません……」とか言っていた衛士とその周りにいた戦術機を助けたり、肩に「A-01」って書いてあった部隊がBETAにやられそうになったときにドラグーンを使ってBETAを殲滅して助けてたり……

あれ？俺って助けてばっか？ま、いっか名前聞かれたけど凶鳥ヒュッケバインですましてるし

「でどうするかだな……」

戦場は幾分か落ち着きを取り戻しつつあった、まだ戦闘音は聞こえるがそれも時期におさまるだろう
このままいてもいいがおそらく……
というか確実に捕まって機体の技術とかいろんなのを根掘り葉掘り
きかれるんだろうなあ

「では非難しますか？」

「どこにさ？隠れる所なんてあるのか？」

『それならまっかせなさい！！』

「うわあ！！」

急に会話に入ってくんじゃねえ！バカ神が、驚くだろう！！

『ぶーんなこと言わなくてもいいじゃん！』

〔しかし急に現れてはおどろきます〕

『ちえ〜』

「……………で何しにきたんだ？」

まさか驚かすためってのはないよな……

『大丈夫だよ〜今回はちゃんとしたものだし〜』

「今回は？」

なんだよ「今回は」ってこれからあるのかよ

『んとね〜ここから太平洋に出て、ある程度出たらそっから南』

……………なんともアバウトな表現だ

「それじゃどこに向かっていけばいいか分からないぞ？」

『え〜』

え〜じゃねえよ。こっちがえ〜だよまったく…

『しょうがないな〜ゼクスにデータ送っておくから、そっから行きなよじゃね〜』

やる気のない返事をしたかと思ったら、通信を切りやがった

〔データ取得、目標に向かいます〕

「あーそうしてくれ」

言葉が投げやりになっていた
初めての戦闘だったせいかものすごく眠く疲れていた

「……悪い少し寝るわ」

「了解、操縦をオートパイロットに設定。自動で目標に向かいます」

そして俺は目を閉じた

S i e d o u t

S i e d ? ? ? ? ? ?

「やっほー」

何か目が覚めたらバカ神がいた

「ちょ！バカはひどいんじゃない!?!」

なら言い直してアホ神だ

「ひ、ひどい」

「うるさい一体何の用だ?」

最近こいつのあしらい方が分かった気がする

「で、真面目になんなんだ?」

「あーうん。君さあ自分の能力ってわかってる?」

「……………そういえば知らんな」

「やっぱりね〜まあこつちも説明しなかったのもいけないと思うけど……」

「で能力はなんなんだ？イノベーターと念動力者ってのはわかってるんだけど」

「そこまで分かってるんだ、じゃあ後これだけね」

渡された紙を広げてみる

「……これマジ？」

「マジマジ」

紙に書かれていた能力はマジでビビった
コレだけあれば最強じゃね？

「まあ君になってもらうのは最強チート野郎だからね」

「だからってここまでか……？」

「いいじゃん君一人しか私が担当するのいないんだし」

「……わかった」

「んじゃそろそろ現実世界で君が起きるころだからここまでだね」

「あいよ、じゃあな」

「バイバイ！あ、あと戻ったら自分の容姿確認するといいよ」

「？わかった」

「じゃあね！」

S i e d o u t

S i e d 煉

「……マス………ター………マスター……」

「う………ん」

「マスター到着しました」

「……そうか」

まだ体がだるい……

「ん……いったいどこに着いたんだ？」

「竜宮島です」

………え？

「ごめん、聞き間違えた。もっかい言って」

「竜宮島です」

……今度は聞き間違えじゃねえ

「どーーーーしてファ○ナーなんだよ!!」

「いいんじゃないですか？中々設備も整ってるようですし」

「コレって死亡フラグ立ちすぎじゃね!!原作じゃこの島、色んなところから攻められてるし!!」

「それは考えすぎなのでは？」

「だが……」

「外見は一緒ですが中はまったく違います大丈夫です」

「………わかった行こう」

ゼクスの説得により竜宮島の中に入る俺でした

5話 竜宮島 ー死亡フラグー (後書き)

竜宮島って作者的に死亡フラグが立ちっぱな気がしてならないんですよ

6話　ただいま諜報中…え？ばれた？（前書き）

主人公の姿は彼ですが中身がちがうのでうまく諜報ができません

6話 ただいま課報中…え？ばれた？

ゼクスに説得され竜宮島内部へ進入していく…つかこんな竜宮島って大きかったつけ？

「いえ、おそらくは原作の約2倍ほど大きいでしょうか」

「なるほど、よく見つからないな？」

「偽装鏡面、ミラージュコロイド、ECS、ありとあらゆる偽装機構が組み込まれています」

「見つからないわけだ…」

「はい、この世界の監視レベルでは到底無理だと考えられます」

「無理ねえ、っと着いたか」

島の大きさや偽装機構についてゼクスと話していたら格納庫に着いた。その後、機体をハンガーに固定した

「ふうこれでよし！ゼクス、調整と整備できるか？」

「了解しました。確認のためアクセスします」

そう言うゼクスはどこかにアクセスし始めた。……一体どこにアクセスしているのだろうか？聞いてみるか

「なあゼクス」

「はい、何でしょう？」

「お前って一体どこにアクセスしているんだ？」

「ヴェータです」

………はい？

「なんだって？」

「ヴェータです」

「……………よし俺はもう何も驚かないぞ、たとえ青いタヌキ型ロボットが出てきてもその妹の黄色いロボットやタヌキが所属しているチームがあっても驚かないぞ」

「マスターもイノベーターですからアクセスできますよ」

「…そうだったな」

まあ後で確認してみるか

「んじゃ、後よろしく」

「了解」

俺はゼクスに機体の整備を任せ、島の探索の向かった

「（やれやれこんな広い島にたった一人か…なんだか寂しいな）」

この世界に来てからまともに人と喋っていないから少し寂しく思ってしまう

まあ喋ってもAIか頭のよわそうな神だけだが

「（…………話し相手にでもWシリーズでも作るか？）」

そう考えたがやめた、確かにほしいがWシリーズの毒舌は苦手だ

「まあその前に、帝都にいった情報を集めなきゃな」

ヴェータに任せるのが一番だが、自分でもやってみたいというのが理由だろう

「んじゃ準備して帝都にいくか」

あ、あとこの体の容姿でも見るか、なんかあの神に言われてたしね

――三週間後、――

「つ、疲れた…」

はい、煉です。現在帝都の中を歩いています

つか自分の姿見て驚いたね、まさかOPPのグラブ・ヴィオレントにうり二つなんだからな…

あの神、狙ったのか？

「しかし、これは…」

話は変わるが、三日ほど前から帝都の中はまるで葬式のような暗い雰囲気漂っている

まあ京都が陥落し、敗走したのだから無理もないといえなくもないが。

「…集めた情報でも見るか」

この三日で集めた情報にはBETAの行動に関するものや、今現在、帝国が確認している自国の戦力などの情報などがある。中には諜報員のリストなどもある

「（こんなじゃないんだけどなあ…おっ、あったあった）」

探していたものそれは凶鳥ヒュッケバインに関することだ

「（出現場所…遭遇時の会話…戦術機ヒュッケバインの装備…）」

情報の数は少ないが確認できただけでもよかった

「（このぐらいなら…ん?）」

何か…視線のようなものが…

「少々よろしいですか?」

目の前はスーツを着込んだオッサンだった

まで…このオッサンどつかで見た覚えが…?

「ええ…どうぞ」

「では」

しかしどこかで…あっ!!

たしか原作で諜報員みたいな活動していた鎧衣 左近だ!!

「どうかしましたかな？」

「い、いえ別に…」

まさかもうばれたのか！？どうやってにげる！？

「そういえば……」

「っ！？」

「カラスというのは日本では縁起がよいものとされています。しかし凶鳥というのはいささか縁起がよいと思いませんか？」

こっちのことはお見通しですか、コノヤロー……………

6話 ただいま課報中…え?ばれた?(後書き)

更新遅れてすいませんm () m
大学の都合でかけませんでした。これからも鈍亀更新になるので申
し訳ありません

7話 職業は傭兵です（前書き）

何だろう？まだ無理やり感がある……

7話 職業は傭兵です

―煉sidol―

現在俺は、帝都城に來ています。何でかって？

ばれたんだよ！！鎧衣のオッサンにな！！

くそう……ばれないと高くくって侵入した帝国軍の基地にハンディタイプのビデオがあったんだよ！！つかなんでこんな世界にあんだよ！！ハンディタイプのビデオが！！

「そろそろ時間ですな。参りましょうか？」

「……………」

ううううまるで死刑台にのぼる気分だ……

―帝都城最上階―

はあゝついに着ちまったよここに……

「では入りましょう」

「……はい」

もう腹くるしかないか……

木製の引き戸をあけるとそこにはすでに10～15人ほどが座っていた

物々しい雰囲気だな：視線で殺せたらってゆう目すらあるんだが……

「鎧衣、この方が？」

「はい、凶鳥ヒュッケバインです」

おいーーーーー！！即効でばらしますかーーーーー！！

「では単刀直入に申し上げます。どうか帝国の傭兵になってもらえませんか？」

へ？

「実はこたびのBETAの侵攻で人員が不足しているのです」

「今はまだ持っているがこのままだとまずいことになる」

「ゆえになんとか人員を確保しようとしているのだ」

なるほどなーてかなんで傭兵やってるってわかった？

と言いつつスーツのオッサンを見る

「おや？私が調べたのは何者かが帝国のことを調べまわってということだけです」

「本当かよ？」

「私です」

声がしたほうを向くとそこにはガー●ラ●●トラがいた

「なにかへんなことでも考えましたか？」

「イエ、ナニモ」

「?、そうですか」

す、するどい…ただ考えてただけなのに!? ボロが出ないうちに話をそらさなければ…!?

「そ、そういえばなぜ俺の名を? 傭兵だったら俺以外にも腐るほどいると思うが?」

「他の傭兵は知りませんが、あなたなら知っています」

「どうして俺のことを?」

「私は一度、あなたに助けられています……」

は? いつ? どこで? どうやって?

「…その顔ですと覚えていないようですね…京都での戦闘の際に助けていただきました」

「あーさいですか…」

確かにあの時はいろいろな戦闘に介入してたしなあ…正直な話ほとんど覚えてはいないんだが…でもどこかには傭兵として雇ってもらわないといかんしなあ…まっ元々、日本に雇われる予定だったしな

「で、金額は?」

「え?」

「いくらで雇ってもらえるんで?」

「では! よいのか! ?」

「かまわん、どうせどこかに所属することには変わらないしな」

というかい返事を出したとたん、急に空気が軽くなったな

「ではよろしくお頼み申し上げます、傭兵どの」

「傭兵ではない、乾いぬいれん煉だ」

こうして俺は日本帝国に傭兵として雇われることになった

7話 職業は傭兵です（後書き）

ちょっと遅いですが主人公のプロフィールです

名前 乾 煉 （いぬい れん）

容姿 ガンダム00Pに出てくるグラীবと瓜二つ。身長、体重も同じ

能力 身体能力は最強、兵士級なら素手でいけるイノベーターでもあり念能力者で もあるがまだうまく使いこなせてはいない。

年齢 転生前は高校生だったが転生後では20歳になっている

一人称 俺

設定は随時更新予定です

8話 帰ってきた”彼ら”

l Side 煉l

取り合えず、戸籍を作ってもらい傭兵として雇ってもらうことにはなったが、その後が大変だった。

一年契約としその後は毎年契約を更新することになったが話が終わった後、技術廠・第壱開発局副部長の巖谷 榮二中佐という人に呼び止められた。このオッサン最初から俺の乗っていた機体がどこで作られたのかとか、構造はどうなっているのとかちよつと…つかかなり興奮したオッサンだった…だって顔真っ赤にして来るんだぜ？

あまりにも怖くて思わず延髄蹴りをかましたよ！！

その後、斯衛軍の人だろうか？黒髪の女の人に捕まって執務室へ連れて行かれた。なんでもこのオッサンの執務室では書類仕事が多まっているらしくここ最近では部屋で高笑いが聞こえてくるらしい…大丈夫か？この組織？傭兵の契約はまだ早かったかも知れん

しかし怖かったなああの男はあまり怖さにOSやらの技術を一部渡すことを約束しちゃったからなあ…かわりに不知火のデータ貰ったし、まあお土産程度にはデータをもっていくか

l 1週間後、竜宮島l

「ふうむ…」

竜宮島に帰ってきた俺はOS以外に何を持っていくか悩んでいた。ぶっちゃけテスラ・ドライブでも持っていこうかと思ったが、まだこの世界の技術では解析すら不可能だろうと判断した。代わりにヴェーダの中からスパロボの世界から型落ちしたレールガンとアサルト・ブレードの設計図を持っていくことにした

「さてと……選別も終わったし、ちょい見に行くか」

俺は自室から出て、トレーニングルームに向かった

ートレーニングルームー

「お、やってるな」

トレーニングルームには多種多様なマシンがありPTのシュミレーターもここに存在するそのシュミレーターは今稼働中だ。そこには仮面をつけた一人の男がいた

「どうだ調子は？」

「問題ない」

答えた男はウォーダン・ユミル、スパロボの世界において『向こう側』の世界にいたゼンガー・ゾンボルトのデータを基に造られたWナンバーズである

「体の検査は忘れるなよ？目覚めたばかりの体はぎこちないから怪我でもしたら洒落にならんのだからな」

「承知している、しかしなれなければ機体にも乗れん」

「わかった、わかったお前は一度決めたらてこでも動かねえ。この1週間で嫌ほどわかったさ」

「そうか」

「ああ、でもなやり過ぎは逆効果だぞ」

「承知」

「ん？終わったか」

ウォーダンと話をしていると稼動中だったシュミレーターが停止し中から女性が現れた

「体の調子はどうだ？エキドナ」

「問題はない……といたい所だがやはりまだ動きづらい所もあるな」

「そうか…その辺は動いて慣らすしかないな」

彼女はエキドナ・イーサツキ。ウォーダンと同じWナンバーズである

なぜ彼らがいるか？それはこの竜宮島の内部にはありとあらゆるTP、MS、OF、などの機体パーツがある。その中にWナンバーズの調整カプセルもあったのだ

しかしあったのはW15とW16のみ、どうしてこれだけ…と首をひねっても分からないので疑問は置いてカプセルを開けた

そしたらまたびっくり本来ならWナンバーズはアンドロイドだがこいつ等は違った、ちゃんと人間としての機能もあったのだ。調べた結果どうやらイノベイドの技術が使われているようで、まさかここまで出来るとは…と煉は戦慄していたりする

それはともかく

Wナンバーズという戦力を持った煉はその日のうちに行動を起こした。まずウォーダンとエキドナの機体だ

ウォーダンはいい、スレード・ミゲルと相場が決まっているからだ（なんのだ？）しかしエキドナをどんな機体に乗せるかが決まっていない

量産型にするか、専用機ワンオフにするか、に二択に迷っているのだが……

「そういえばエキドナ、機体の方はどうするんだ？量産型を使うか専用機ワンオフを使うかで迷ってるんだろ？」

「ああ……量産型ではエルアインス、ランドグリーズ、ラーズアングリフの三機、専用機ワンオフではアルジェルグのどちらかにしようとは思っているのだが……」

「……決まらないのか？」

「………量産型にすればサポート面では問題がないんだが、攻撃面で劣る。しかし専用機ワンオフでは攻撃面で問題はないが、サポート面で問題が生じる」

「つまり量産ではサポートに問題はないが攻撃力不足と……専用機ワンオフでは攻撃力が高すぎてサポートできないと……」

「そうだ」

「だったら状況に応じて機体を変えれば？」

「ソレだと変更時に敵から背を向けなければならぬ」

「ならアシュセイヴァーならどうだ？アレなら問題ないと思うが……」
「ふむ、検討してみるか」

煉の提案を聞くとエキドナはまたシュミレーターの中へ入っていった

「あいつ…何回目のシュミレーターだ？」

「俺のしている限りでは3回目だ」

「ちょー！止めろよー！ウォーダンー！！！」

「止めたら止めたでうるさいぞ」

「うっ……」

「待っているしかあるまい」

その後エキドナが出てきたのは3時間後だった

ーメデイカルルームー

シュミレーターを出たエキドナが倒れた。慌ててエキドナに簡易医療機器を当てるが結果は疲労だった

「まったく、どうしてやりすぎるのかねお前は」

「面目ない」

「まだ自分がアンドロイドだと思っているのか？」

「……」

「もう体は人間なのだから今度から気をつけろよ」

「……了解した」

「お前もな、ウォーダン」

「……承知した」

実はWナンバーズの二人、スパロボの世界での出来事を覚えている

のだ。ウォーダンクレイドルまで、エキドナはホワイトスターでアクセルを庇ったところで意識がなくなったらしい、その後目覚めたらここにいたと言うんだから、最初聞いたときは驚いた。

聞いた後神さまに連絡したらどうやら世界の境界がすこし歪んだらしく二人の魂といわれるものがこちら側に来てしまったらしい

事故らしいのだが向こうの世界にはもう二人の魂がはいる器がないのでこちらで生きていくしかない、いちよう二人にも説明はしたが半信半疑だったためデータや映像など見てもらって納得してもらった

がしかし気になることが一つ……

「ウォーダン」

「なんだ」

「……その仮面は取らないのか？」

「……………」

「いや、前々から気になっていてね……って待てなぜ刀に手をかける」

「……………」

「待て待て！ほんとに待て！！わ、悪かった！！そんなこと聞いて悪かった！！」

「……………」

「ちょ本当にわるkア……………」

今日の竜宮島は平和である

8話 帰ってきた”彼ら”（後書き）

O G、Sからウォーダンとエキドナを出してみました
しかしエキドナの口調が分らん

9話 完成した"；ブツ"；とハイブ（前書き）

まず最初に今回の地震で亡くなった方々のご冥福をお祈りします。

皆さんどうもバースバイスリープです。実は地震のとき大学に行ってまして通学中に地震にありました。しかも避難した駐車場では隣の家から瓦が振ってきて大変危険な目にありました。避難するとき避難場所の回りもよく見といったほうがいいですね

9話 完成した"ブツ"とハイブ

ウォーダンによる殺人未遂から一月ほどたった日、俺は帝国の要請で依頼されていたものを輸送機に乗つけて帝国に向かっていたつかウォーダンめっさ怖かった（うう、今思い出しても寒気が……ブルブル

……ふう、取り乱してしまっただすまなかった

取り合えず戦術機用の試作OSとレールガン、アサルト・ブレードの技術を帝国の技術局に渡したんだがその反響がすごいことすごいこと、技術廠からは即座に質問やら他のはどうなのかきて大変だった……

まあそのおかげか巖谷 榮二中佐とは仲良くなれた
最初は内心ビクビクしていたが話せば中々いい人だった

……でも自分の娘みたいな子を「嫁にする気はないか？」と言うのだけは勘弁願いたい
会ってもないのと言うのもなんだが、いちいち断るのも面倒なのだ

「そろそろ到着します」
「ん？そうか分かった」

輸送機を操縦していた量産型Wナンバーズに答える
実は量産型Wナンバーズもウォーダンやエキドナとは違う区画に大量のカプセルと共にあったのだ
今では機体のメンテナンスから食堂の料理まで数々の仕事をこなしてくれている

「しかし本土防衛線がいまだに構築できんとはな」

ヴェータが集め書かれた報告書にそこまで戦線の維持が出来なくなっているのか？嫌な予感がよぎりウォーダンに連絡しようと思いつながら俺は帝都城へと待っていた車で向かった

ー帝都城・会議室ー

指定された会議室に来てみたのはいいが……なんだこの人、人、人の海は！！

しかもトビラをあけた瞬間みんなこっち向いてギョロって向いてくんだぜ！！コッチミンナ

「おーい、こっちだ乾特佐」

呼ばれたほうを見ると巖谷中佐が手を振っていた

「お久しぶりです。巖谷中佐」

「いや、敬礼はいらないよ。乾特佐」

軽く巖谷中佐に挨拶をして、今回の本題にはいる

「巖谷中佐、この人数はなんなのですか？なにやら軍人ではない人もお見受けしますが…」

「ああ、ここにいる人々は君のOSにいたく感激したもの…と言っておこうか」

「は？」

「ははははは、それじゃ分からないか！実は一週間ほど前に君が提供してくれた試作OSの試験が終わってね」

「はあ…」

「試験を行った富士教導団の評価が高くてね、『もしこのOSの完全なものが出来れば衛士の死亡率が半分になるかもしれない』と報告書に書かれていたのだな」

えっマジで！？いちようアレってTC—OSをグレードダウンしたようなものなんですけど…

「それに電磁投射砲や高周波長剣など革新的な技術もあいまってかなり評価がたかいぞ」

「ほ、本当ですか？」

「ああ、そして今度はそのOSを積み込んだ機体だ。期待しないほうがおかしいだろう？」

「そ、そうですか…」

あーなるほどなあ、もしかして軍人じゃない人は俺の技術目的か？

「そろそろ殿下が来る。準備はいいのかい？」

「！　そうでした、すいません準備してきます」

そして俺は会議場の壇上へ上がっていった

「今回、発表しますのは先の試作型OSを組み込んだ機体となります」

そう言ったとたんに会場がうるさくなった。あ、司会の人が『静粛に!!』ってマイクに向かって叫んでる

「コホンッ：発表する機体は機体型式GAK-01、蒼火、です」

モニターに表示された機体に会場がさらにどよめき始めた

「まず今回発表したGAK-01、蒼火、には今までの戦術機とは性能は桁違いです。戦術機は戦闘機から派生したのに対し、蒼火は完全に戦闘を目的として作られています」

ここで一端話をきり、質問がないか見回る：お、手が挙がった

「どう違うのですか？見る限りだと同じに見えるのですが？」

「戦術機は外部骨格の構造をしており、攻撃され装甲が剥離または破壊された場合機体バランスに影響がありますが、蒼火の場合は完全に、人型、として作られています。ゆえに四肢のいずれかを欠損しようが、装甲が壊れようが行動に一切の支障はありません」

「わ、分かりました」

「はい、では次に移ります。次は兵装ですがこの機体の最大の特徴は『装備換装機構』です」

聞いたことがない言葉が出てまた言ったとたんにザワザワと騒ぎ始めた。

「『装備換装機構』とは装備を適宜換装することにより1機でどんな戦場にも出せることができます
装備は三種類あり砲撃戦仕様の『焰』^{ほむら}、高機動戦仕様の『天』^{あまつ}、接近戦仕様の『雷』^{いかずち}です」

今度は騒ぎが聞こえず、逆に会場は呆然とした感じになっていた

「それでは機体の性能について説明します。まず……」

その後、説明は質問をいれて3時間ほどかかった

―三時間後―

「うひいゝ疲れたあゝ」

休憩に入り、待機部屋で休んでいた俺は、テーブルに突っ伏したあまりにも質問が多すぎる…てかどう見ても軍人じゃない奴は、こちらの技術狙いだな

目が獲物を狙う鷹の目だったし

「お疲れさまだな乾特佐」

「巖谷中佐…」

中佐から持ってきてくれた合成コーヒーで喉を潤し、ため息をついた

「はっははははは、やっぱり質問攻めが利いたかい？」

「ええ…かなり…」

説明が終わったとたんに、全員が質問を投げかけてきたのだ…うう、みんな目が怖かった…夢に出てきそうだ…

「……そういえば中佐話は変わりますが」

「ん？なんだね？」

「BETAの防衛線が維持できていないとは本当ですか？」

「っ！…それをどこで？」

「少々、そちらのメインコンピュータをハッキングさせてもらいました」

「…そうか」

巖谷中佐は残っていたコーヒーの残りを飲み干し真剣な表情でこちらを見た

「正直な話かなり厳しい、戦術機でもそうだがやはり衛士の数不足している」

「……………」

「それに米国が条約を破った件もある。元々その戦力も期待してはいたがこれでは……」

「難しいですか……」

「ああ……」

カップを捨てると、巖谷中佐は煉に振り向いた

「まったく、君は味方なら頼もしいが、敵ならば恐ろしいことになるな」

「お互いさですよ、巖谷中佐」

「ふふふ、そこまで君に買ってもらえるとは中々私も捨てたものではないと思えてくるよ」

そのとき、外から轟音と立っていることがやっとと思われる振動が伝わってきた

「ッ!?!…な、何だ!?!」

「この揺れは一体?」

煉と巖谷中佐は振動の原因を知るために発令所にむかった

―発令所―

発令所に着いた煉達はすぐさま何が起きたか確認し始めた

「どうした！？何が起きた！？」

「よ、横浜方面に飛来物が確認されました！！」

「飛来物？…ま、まさか……」

巖谷中佐が考えていたことが次の報告で現実となった

「ッ！？照合確認！！BETAのハイブユニットです！！」

ここに一月ほど早いBETAによる横浜のハイブ建設が始まった

9話 完成した"ブツ"とハイブ（後書き）

皆さん自分が書いているもう一つの小説ですがあまりにも設定がひどくお見苦しい内容になりこのことからもう一つの小説は明日中には消すことにしました。

今書いているマブラヴの小説がひと段落しましたらまた違う小説を書こうと思います。

10話 戦闘開始 ー横浜BETAー(前書き)

今回はこの作品で登場したオリジナル装備”天”^{あまつ}の説明です

高機動装備”天”^{あまつ}

総合兵装ストライカーパックをそのまま使用、唯一の違いは機体のコストを下げるために対艦刀をオミット、センサーの質を落とした違いがある

10話 戦闘開始 ー横浜BETAー

ー格納庫通路ー

「クソッ!!」

発令所の報告を聞き、俺は急いで格納庫に向かっていた

「(BETAの侵攻が史実より早い…どうなっている!?)」

走りながらも考える。なぜこうなったかを、そしてこの状況を打破するために脳量子波を使用し、ある所へ通信をした

「(聞こえるか!? ウォーダン!!)」

「(ッ!! 誰だ!?)」

「(落ち着け! コレが脳量子波だ!)」

「(コレが?)」

「(そうだ。ウォーダン、戦いの時が来たぞ)」

「(何!? しかし予測では…)」

「(ああ一ヶ月後だが奴らのほうが早かった。今横浜にハイブを作ろうとしている)」

「(では!?)」

「(例の機体は80%しか完成していない、すまないが急いで着てくれ!!)」

「(承知)」

ウォーダンとの会話が終了したとき格納庫に着いた

「エキドナ! どこだ!!」

「ここにいるぞ。どうした？」

持ってきた機体の近くにいたエキドナが駆け寄ってきた

「一体どうした？何かあったのか煉？」

「ハイブリットが横浜の落ちた！！！」

その言葉に格納庫の中が騒然となった

「蒼火は出せれるか！！？」

「ああ、だが装備は天^{あまつ}だけしかないが……」

「それでいい！すぐに出してくれ！！あと例の装備も一緒に出せ！！」

「わかった！！お前が出たら私も出よう！！」

格納庫内は慌しく動き、戦術機の点検を大急ぎでやり始めた

―多摩川―

「ちくしょう！！クソツタレめ！！」

10機ほど撃震が突撃銃で攻撃し、辺りのBETAを駆逐してはいるが圧倒的な物量の差にだんだん追い詰められていった

「クソツ！！HQ！HQ！こちら^{ガンマ}Y1！もうこちらは持たない！！至急撤退指示を！！」

『こちらHQ、撤退は許可できない。くりかえす撤退は許可できない』

「ッ！！了解だ！！こんちくしょうが！！」

^{ガンマ}Y中隊の隊長は通信を叩ききり、各隊員に告げた

「HQからの指示は当てに出来ない！！奴らは撤退は許可できないの一点張りだ！！」

『どうするんですか！？隊長！！』

『くっ！！こちら^{ガンマ}Y4！！弾薬がもうすぐ尽きる！！早く補給を！！』

『こ、こちら^{ガンマ}Y6！BETAに取り付かれた！救援を！至急救えぎやああああああ！！』

『^{ガンマ}Y6がやられた！！防衛線に穴が空くぞ！！誰か穴を埋めろ！！』

『クソツ！！ダメだ！こちらも手がいっぱいだ！！』

『隊長！！このままでは我が中隊は孤立し、BETAの攻撃をまともに食らい全滅します！！』

「わかってるさ！！^{ガンマ}Y3！！全員聞け！！我ら中隊はこれより、後退する！！」

『しかしそれでは!!』

「わかっている!! しかしこのままでは我々も危うい!!」

撃震たちは一歩づつ後退していくが、BETAの侵攻が激しく一機また一機と食われ潰されていった

「クソッ!! 全機、機体状況を報告しろ!!」

『ガンマ 弾が尽きました! 近接武装で対応していますが…そろそろ限界です!!』

『ガンマ ヴ4! 左腕を損失! 弾薬はまだありますがセンサーが一部使用不能です!!』

『ガンマ ヴ7! 機体の四肢に問題は無いが弾薬と推進力がもうない!!』

『ガンマ ヴ10! 右腕を損失! あと近接武装がありません!!』

『ガンマ が、ガンマ ヴ12! 右腕損失、左腕マニピュレータ破損しました!!』

『ガンマ くっ! ヴ7、12は撤退! その際3は7の、10は12の近接武装を貰え!!』

『『『『了解』』』』

ガンマ ヴ(ガンマ) 7と— ヴ12はすぐさま反転、撤退を始めた

「HQ応答しろ!! HQ!!」

『こちらHQどうした?』

「今から二機、撤退させる! 比較的安全なルートと撤退支援を!!」

『現作戦領域における撤退ルートはありません!』

「なっ!!」

『現戦力でBETAからの撤退は出来ません!』

もししようとすればそこから防衛線に穴が空き、瓦解します!!』

「クソッタレが!!」

ヤケクソぎみに銃を打ち続けるが最早焼け石に水の状態だった

『うわあああああ！！BETAが！！BETAがああああ！！』

『ちっ！誰か^{ガンマ}Y12の救援に…』

『無理だ！行ったらこちらがやられる！！』

^{ガンマ}Y12を見捨てようとしたそのときだ

『ならこちらで助ける』

通信が入ってきたのだ

「な…」

通信が入った瞬間、^{ガンマ}Y12に群がっていたBETAが内側から爆ぜたように見え、死んだ

『^{ガンマ}Y中隊大丈夫か？』

「はっ！」

あまりにも非現実的で声も出せなかったが、再び通信が入り我に返った

「あ、ああ何とかな…」

『そうか、ならお前たちは撤退しろ』

「なっ！！……大丈夫なのか？」

『この機体と俺達を舐めないで貰おうか』

^{ガンマ}Y1は正面を見据えるとそこには蒼いカラーリングをした戦術機がいた

その機体は背中に何か装備しており、装備から正面まで両肩の上に

二つの砲筒が伸びていた

『早く行け！もうすぐ来るぞ！！』

「わ、分かった。幸運を祈る！」

そう言うに残った^{ガンマ}Y中隊は撤退を開始した

―煉Side―

「やっといったか……」

撃震たちが撤退していくのを確認しながら、手に持っていたレールガンを突撃級に打ち続けた
レールガンは突撃級の鋼殻を破り、後ろにいたBETAを巻き添えに死んでいった

「レールガンの威力はこのぐらいか…後は」

俺は蒼火の腰に装備されている長剣を手を持ち、BETAを切り裂いていった

「よし！長剣の出来具合もいい」

『煉！』

「ん？エキドナか」

『もうすぐウォーダンの機体が来る。気をつけろ』

「わかった。ソレと今は生存者の保護と護衛を最優先に、BETAは出来る限りでいい！殲滅しろ！！」

『了解した！』

通信が終わるとさらに出てきたBETAに銃口を合わせ、弾を放ち、BETAの死骸を高く築き上げてゆく

というかハイブユニットにはこんなにもBETAが潜んでいたのか？いくらなんでも多すぎると思うんだが……

そう思っていたとき、唐突にアラームが鳴り始めた

「何だ！？」

モニターの端っこにアラームがなった原因が記されていた

〔生命反応。生存者の可能性アリ〕

「生存者だど！？」

俺は反応があった場所へ急いで向かった

??? Side

くそっ!!くそっ!!くそっ!!

父さんが死んだ!!母さんも死んだ!!

俺の目の前で奴らに食われていった!!

アイツの両親も!!

無力な自分が恨めしい……

泣き叫ぶ幼馴染に手を握りながら、必死に走ってきた……
けど奴らはこっちにも向かって来た!!

帝国は誰も助けにはきてくれなかった……

誰か…誰でもいい……

純夏は……純夏はだけは助けてください!!!!神さま!!!!!!

―煉Side―

反応があった場所に行くと二人組みの男女がBETAから逃げていた

「あそこか！」

俺は二人を追っているBETAに向かって、全ての火力を叩き込んだ
大量の弾薬を吐き出し、BETAを殲滅した俺は、追われていた二人に

外部スピーカーで呼びかけた

「二人とも大丈夫か！？」

声をかけると二人とも怯えたように震えるが、自分達を追っていた
BETAが死んだことが理解できていないようだ

しかし今はそんなことに時間を割いている余裕はない

俺は機体の片ひざをつけるとコクピットをあけて叫んだ

「急いでこっちに乗れ!!! いつBETAが来るか分からない!!! 早く!!!」

その声を聞くと、二人は急いでこちらに来た

俺は機体のマニピュレーターを操作し、二人を乗せコクピットに近づけた

「早くこっちに移れ!!!」

「は、はい」

俺の怒鳴り声に驚いたのは二人とも声が震えた
二人が移ったのを確認すると急いでハッチを閉め、機体を立ち上げさせた

「二人とも問題ないか？」

「だ、大丈夫です」

「は、はい」

「よし、行くぞ!」

俺はペダルを操作し機体を一時、離脱させた

その後、ウォーダンが到着し一気にBETAの防衛線があがったそう
うだ。

え、ウォーダンの登場シーン？

.....

.....

.....

.....

.....作者に言ってくれ.....

10話 戦闘開始 1横浜BETA1（後書き）

か、かなりの無理やり感がありますが、これからも精進していきたいと思います

感想、アドバイスなどがありましたらどしどし送ってください。待っています

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8191p/>

MUV-LUV ALTERNATIVE ～転生者は世界を救う？～

2011年3月25日23時28分発行